
雷狼竜として生きた者の物語

龍竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雷狼竜として生きた者の物語

【Nコード】

N2886Z

【作者名】

龍竜

【あらすじ】

ある人間が神のミスで殺されて、転生する所謂テンプレって奴です

主人公は雷狼竜として生きる物語です

けっして最強ってわけではないですが、かなり強いです

プロローグ（前書き）

ただでさえ、更新速度落ちてるのにやりやがりましたよ俺

まあやろうと思った理由は、モンハンのモンスターになりました系の奴でジンオウガの奴が見えないと思い、やりました。後悔はしてるけどやっちゃったもんは的な感じでやります

プロローグ

ここはどこだ

目の前は完ぺきな真っ白で、なぜここにいるのかすら理解できない歩きたそうと思うけど動かない、腕を動かそうとしても動かない動くのは目と首だけ

何にもできないと思い、ここに来る前のことを思い出す

俺はたしか、いつも通りの学校で、部活を終え速く帰りたい一心で自転車を飛ばしてた。

そして俺はいつもは通らない人気のない道を通っていた
そこが近道であることと人あんまりいないから自転車を飛ばす絶好の場所だった

俺は近道を通り終え、信号を見て道路を渡ろうとした

しかし、渡ってる最中に大きな地震が急に起きた
そう、あまりにも急な地震で明らかに震度5ぐらいなのがわかる
周りの車は急停止したが、あんまりにも急すぎてパニックになった車があった

その車は俺に向かってきていて、俺は強い地震のせいで動くことができない、しかしなぜかその車はガンガンとスピードを上げている
そして、俺はその車と衝突する直後に意識が飛んだ
そしてこの真っ白で何もできない謎の空間にいた

「だれかいないのかー」

「嫌ね？普通に寿命がきて死ぬのはわかるけど間違っ
て殺されるっ
てどういうこと？それとあんただれよ」

「わしはお主らが言う神様みたいなものじゃ」

ん？この流れなんか聞いたこと？が「あつた気がする

」所謂テンプレじゃ」

「おおメタ乙、テンプレなら、なんだ？転生でもさせてくれんのか
」？」

「そうじゃ」

「おお、まじで？あのSSとかよくある奴？」

「そうじゃよ、さっそくじゃが、願い三つと世界を言うがいい」

「なら、まず身体能力MAXで、あらゆる状況化でも生きれるよう
にしてくれ」

「ほう、なかなか面白いのう、あと一つはなんじゃ？」

「じゃあ、戦闘能力っていうかセンス？を極限まで」

「ふむ、では世界を言うがいい」

「世界はモンハンの世界」

「む、なるほどだからこの願いか」

「そうだよ、だって結構自由に生きれるじゃん」

「違うじゃないのう、しかしわしは不老とか言っと思っただんじやがのう、面白い奴じゃ、もしわしの思った通りだったらさっさと決めて落とすつもりじゃったが、予想外だったからの、特別に扉にしよう。ほれ後ろに扉があるからそこを抜けるがいい、抜けたら意識が無くなり、生まれると思うからな」

「おお、俺運がいいな、それとご丁寧にありがとな」

「まあこちらら部下のミスだし、お詫びもいいところじゃ、元気でな」

「ああじゃあな」

そして俺は扉をくぐりぬけた

プロローグ（後書き）

次は設定です

設定（前書き）

設定です

これは物語が進むごとに増えます

設定

主人公

人間の時の名前：黒乃龍斗

性格：たまに冷静で、たまに熱血、常時はマイペースな感じ

好きなこと

寝る、食べる、体を動かすこと

読書

嫌いなこと

頭を使うこと

嫌いなもの

正義という言葉

今作の主人公でジンオウガになってしまった人、実力は基本はかなり強い、神様にももらった戦闘センス最強のおかげでジンオウガで最強レベルである

イビルジョーとか、一応古龍にも勝てるが運が左右することの方が多い

唯一のジンオウガには無い物もある、それはなぜか電気のビームをだせることと尻尾を使ったソニックブームをだす

しかし、さすがにアカムやウカムといった竜には勝てないがそのままでは差はない

設定（後書き）

では、次回

一話（前書き）

考察時間5分、修正時間2時間

モンハン書きやすいです、あと省略しすぎた

一話

俺の目の前にジンオウガがいる、狩りにきたんじゃない
俺は生まれたがその親がジンオウガだった、そして俺自身もジンオウガだった

あのさ、たしかに身体能力とあらゆる状況化でも生きれるようにしてもらっているけどさ

人間じゃないってだれが予想できる？

でもよくよく考えてみれば転生だし、絶対人間に生まれるとは限らないし、そこを今嫌がってもあれだし

でも、これでいいと思う　なぜなら

ジンオウガってかっこいいからだ！

この間5分

閑話休題

そして生まれて10年くらいたった

え？いきなり飛ばしすぎ？

やめてくれ思い出したくもない、言い忘れたが俺は高校生だったわ

けだからいまさら赤ちゃんプレイとか羞恥心で死ぬる

そしてなぜか生まれて5年で、十分以上な力があつた

なぜか、アオアシラの半分くらいしかない（四つん這いで、まあ普通な態勢）に力で圧倒した

なぜアオアシラと遭遇したのか、それは単純にはぐれただけ

そのあとお袋？にちゃんと合い、しとめたアオアシラを食べた、最初のころは気分が悪かった

しかし、この自然の中で生きるにはこれに耐えられないといけなから、我慢し続けたが

慣れとは恐ろしい、もう食べることに抵抗がなかった

10年、この十年間は時間を見つければ狩りの練習と力の効率の良動きの練習だ

スパルタだったこと戦闘センスMAXもあり、今はお袋に圧勝可能なほど成長した

そして生まれて15年がたった

大きさはまだジンオウガとしては小さいが、ちゃんとした成体である

お袋は普段は厳しかったが、いざ離れるとすると悲しい気分になる

俺はすこし、悲しかったが俺は自由に生きれることを喜んだ

俺は親から離れて、2年たった、今はまだきまった縄張りがない、
ほぼ旅も当然の状況だ

この二年間は非常に濃かった、ある時なぜか砂漠にいて、ティガレ
ックスと遭遇したり、ディアブロスにも喧嘩売られたりした。

勿論ティガレックスはちゃんとしとめた、ディアブロスはさすが暴
君と呼ばれるだけあって、撃退が精いっぱいだった

そしてところどころにある、オアシスに寄りながら、自然のある所
を探した

砂漠で1年間過ごしてしまった、やっと見つけた湿地帯、そこで俺
はしばらく体を休めようとした

しかし、ナルガクルガとその亜種に見つかり戦った、しかし軽く電
撃を飛ばしたら一発で目を回してしまった

食べようとして近づくと、腕部分の刃の部分を見た、軽く叩いたり
して気がついた、これ骨だ

だからか、と納得した、骨を伝って電気が脳に直撃したも当然だ、
そら一撃だろうな

ひとまず食べれる所を探したが、食べれる所が少なすぎるし、食べ
ただけで食った気がしない

そして俺は、ある森林で落ち着いた 既に体の大きさはジンオウガで銀冠ほどの大きさだ

最初は見て驚いたのが、ここはモンハン3rdのところだ、時期もあつて、綺麗な紅葉だ

ひとまずは落ちついた、ここを縄張りにしようと思った

しかし、ここには既に別のジンオウガがいた

俺は、やっと見つけた自分にあつた所だ、力で奪い取ることにした

相手のジンオウガは俺の殺気を感じて戦闘態勢にはいった

俺は先手必勝とまでに、前足を相手の頭めがけて振り下ろした

相手は驚きながらも避けた、そして明らかに逃げ腰になつてる

なぜか、それは簡単だ、俺が振り下ろした所が少し大きいクレータ―ができてるからと、俺の体の大きさだ

相手の方は、力の差をわかったのか逃げたっていった

俺は同族との戦いを経験してないから、少し期待してたが期待はズレだった

しかし、さすがに無双の狩り人と呼ばれているほどの竜だけある、引き際を見極める

無理して戦い、勝てたとしても自分もただじゃすまないからだ

俺は自分の種族を少し誇りに思った

そして、ハンターがこの縄張りに侵入してくるのは5年後だった

一話（後書き）

感想お待ちしています

3話（前書き）

思考時間20分 修正時間1時間

結構時間を飛ばしまくりますが、なんか戦闘ばかりですが基本な日常を番外編で入れたいと思います

遅れましたが、この物語は

3話

あれから、二年たった。俺は、あの時よりも強くなり体も大きくなった、大きさは金冠の一番大きいぐらいだろう

それと、この二年間わかったことがある、俺はなんでかやろうと思えばいつでもすぐに超帯電状態になれることだ

最初はチート？と思ったけど縄張りに侵入してくる奴が強かった、イビルジョーが一カ月間隔で侵入してきてる

最悪な場合、二匹か三匹を同時に相手しなければいけない時がある、この時は逃げたかったが

片方必ず小さいのがいたからだ、子供に狩りの仕方を見せようとしてるのだろうか、だが俺を狙ったのが運の尽きだった

これだけではわからないと思うから一つ例をだそう、親一匹と、ちび一匹の場合の戦闘だ

最初に電撃を飛ばして少しずつ蓄積させながら中距離戦を展開してた、そしてある程度しびれ始めた時に、飛びかかり

首めがけて全体重を乗せた、右腕を叩きつけた。この一撃でハンマーの気絶の状態になった

俺は即座に尻尾を回して空に大ジャンプをしてそこから、左腕を叩きつけた。ついでに爪も突き立てた

そしてこの一撃で親のイビルジョーの首をへし折った。少しピクピクしてすぐに動かなくなった

そして子供の方は親がやられて逃げて行ったらしく見当たらなかった

そしてその子供はジャギイの群れに襲われたらしく、ほとんど原形の残ってない死がいがあった

とまあこんな感じだった

他の時は複数を相手にするんだが、なぜか仲間割れみたいなことが起きてたからよかった時と

協力してくる時があった、まあどっちみち攻撃が味方にあつたたりして仲間割れして味方食つたりしてたし

まあこんな感じが主だったむしろこれ以外ない

そう、こんな感じで二年間たつたわけだが、何やら異変が起きたらしい

知り合いのジンオウガが逃げてきた、聞いてみると逃げてきたらしいが何があつたのかはわからないと言つてた

俺は少し興味ができたから行ってみることにした、この縄張りはずいつに任せたが力は下位のジンオウガだから心配だ

本人は死なない程度にがんばるといつてた、死なれると俺の数少ない知り合いがいなくなるから俺はそれを頼んだと言い向かうことにした

あれから数日がたった。俺はある山を登ってる、さっき言った知り合いの山だ。

近づけば近づくほど雨が強くなる、風も強い、その時俺は何か思い出した

たしか、これアマツじゃね？

俺は今恐ろしいほど逃げたくなってきた。古龍とは合うことはなかったが力はすさまじいとは聞いていた

ゲームだと普通に倒せるけど、こつリアルになると改めてハンターってすげえなー

ひとまず帰るか、そう思った直後入ってきた道が崩れた。

明らかに俺の存在に気付いたから逃げださないようにしてあるようだ

前に進むしかないようだ

俺はそう渋々前の唯一の道を進む、そして頂上が見えてきた時、すごいプレッシャーみたいな物が俺を襲う

倒れそうだったが、なんとか自分に頑張れやればできると某炎の妖精の応援を自分に言い聞かせて向かう

そして頂上にきた時目の入ったのは、明らかに水の生物を意味しそうなヒレとかヒレとか、そして空を泳ぐように飛ぶ竜

アマツマガツチ

リアルで見るとすげえけど最初に思ったことは、「あ……………俺死んだ」って思ったよ

しかもあいつ俺を殺す気満々だし、だめで元々だ。返り討ちだと自分を奮い立たせた

まず、自分より力のあるのが相手の場合はこちらから攻めるより力ウンターを狙う方が効率がいい、相手が自分より質量がある場合はたたみかけるより自分の土台に持ち込めればどうとでもなる

相手は俺を見下しているはずだ。それとあいつのウォーターカッター？の時に電気を当てたらなんとアマツの方に流れて言った

たしかに電気とは言え、虫が元なんだけど存外いける物だ

しかしあんまり効果が見られない

俺はこの通常状態だと勝ち目がないと思った。しかし超帯電状態になるには数秒間必ず隙ができる

通常とは違う吸収の仕方だけど、一気になる方法がある、どう言う原理か、思いつきり吠えろと

体の表面に付着してる虫が一気に強くなり、通常の虫より遥かに協力的な虫になる

しかも自分でところと思はない限り解けない、まさにチート

あとついでこの状態になったら、なぜかソニックブームみたいなものが出るようになる

しかし、相手は古龍だ。俺が吠える間に攻撃してくるかもしれない隙を少しでも見せれば一気につぶされると思う、どうするか……と思った

そこで俺は思いついた、また前みたいに少しづつ蓄積させていけばいいんだと

考え付いたら即行動だ

長くなったので省略、え？なんでだ？だって同じこと繰り返してんだよ？

閑話休題

やっと、動きを鈍らせるまで来た。もう明らかにフラフラのアマツが大きく空を飛び俺から離れようとする

俺はそこで俺に警戒を緩めたのを見逃さず、一気に吠えた

しかし俺が吠えると同時にアマツは逃げていった、遙か遠くに行ってしまった。そうかこれはリアルだった、ゲームだと討伐しかできなかったし

俺はもうボロボロ、爪は折れ、角は片方折れ、顔に浅いが傷がある

俺は引きずるように縄張りに戻った

一週間かかって縄張りに戻ってきた、そこで見たのは丁度討伐された知り合いだった

俺は怒りで殺しに向かおうと思ったが、体が言うことが聞かなかった

俺はそこを離れて、ある意味一番信用してる友達の所にむかった

その友達は、ディアブロス、あの時撃退が精いっぱいだった奴だ

場所は砂漠だが、かなり大きい自然のあるオアシスのあるところだ

3話（後書き）

はい、いきなりアマツでした

なぜいきなりアマツなのか、それはアマツは既に着ていたんじゃないか

そう思ったのです

あとアンケートもどきですが、これからだすモンスター、ディアの名前を決めたいので誰か、案をお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2886z/>

雷狼竜として生きた者の物語

2011年12月11日17時51分発行